

## 岐阜県感染症発生動向調査（2019年第1週～第5週分、1月分）コメント

平成31年2月20日

月番：大西 秀典

### <全数把握対象疾患>

- ・ 一類感染症については、発生報告は無い。
- ・ 二類感染症については、結核は、発症患者および潜在性結核感染症のいずれも昨年大きく減少したが、今回の対象週において昨年とほぼ同等の報告数であった。
- ・ 三類感染症については、今回の対象週において発生報告は無かった。
- ・ 四類感染症については、レジオネラの発生報告が1例のみみられた。
- ・ 五類感染症については、カルバペネム耐性腸内細菌科感染症、急性脳炎、劇症型溶血性レンサ球菌感染症、侵襲性インフルエンザ菌感染症、水痘(入院例に限る)、破傷風の散発例が報告されている。また、侵襲性肺炎球菌感染症が8例で前年同期と同数、百日咳が8例の報告があり、他の5類感染症と比較して発生数がやや多い。
- ・ 急性弛緩性麻痺(急性灰白髄炎を除く)の新たな発生の報告は無かった。
- ・ 後天性免疫不全症候群の報告は、今回の対象週において無症候性キャリアの1例のみだった。
- ・ 麻疹患者の報告が5例みられた。

### <定点把握対象疾患>

- ・ インフルエンザの発生報告が著しく多く、県全体で20,517例の報告があった。これは前年同期比137.3%、前々年同期比173.6%で例年よりかなり多い発生数である。
- ・ RSウイルスが前月比76.0%、咽頭結膜熱が前月比81.6%、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎が前月比71.1%でいずれも減少傾向である。
- ・ 感染性胃腸炎はコンスタントに報告されているが、前月比42.8%、前年同期比77.0%と今回の対象週においてかなり少ない。
- ・ 伝染性紅斑の発生は前月比86.8%で減少傾向ではあるが、前年同期比2333.3%であり、かなり発生が多い。全国的にも流行が持続しており注意が必要である。
- ・ 流行性角結膜炎の発生は前月比80.0%で減少傾向ではあるが、発生が持続している。

- ・ 結核は、毎週コンスタントに報告があり、引き続き県民および医療者への注意喚起・啓発が必要である。
- ・ インフルエンザの著しい流行がみられており、県民への注意喚起が必要である。
- ・ 県内でも麻疹患者の発生がみられており、ワクチン接種の啓発も含め県民への注意喚起が必要である。
- ・ 伝染性紅斑の全国的な流行がみられており、県内でも発生数が多い。特に妊婦への注意喚起が必要である。